//////////////////// *Polarography Lounge* //////////////////

志方益三先生を偲ぶ会

Memorial Party of Prof. Masuzo Shikata

北隅 優希, 白井 理*

Yuki KITAZUMI and Osamu SHIRAI*

Received; July 31, 2015

本学会の名称になっている「ポーラログラフ」の発明者である志方益三先生を偲ぶ会を、本年4月18日に京都大学農学研究科および料亭天寅（左京区元田中）において開催致しました。参加者は志方益三先生の御令孫である志方隆司先生（京都府立林業大学校教授）ご夫妻、志方益三先生の親友であった武井三吉先生の御子息である武居三郎博士、本会元会長である池田篤治先生（京都大学名誉教授）、木原壯林先生（京都工芸繊維大学名誉教授）、垣内隆先生（京都大学名誉教授）、現会長の加納健司先生（京都大学）、近隣の理事である大堺利行先生（神戸大学）、前田耕治先生（京都工芸繊維大学）、山本雅博先生（甲南大学）、事務局の北隅、白井であった。本会を開催するに至った経緯は、加納先生が和光純薬時報に、志方益三先生の人物伝についての記事 [1] を投稿されたことをきっかけに、京都大学の近くに志方隆司先生がお住まいであることが判明したことに始まる。さらに、昨年が本学会創立60周年であり、志方益三先生が亡くなられてほぼ半世紀たったと

写真1 晩年の志方益三先生

写真2 樺太における試料木材の輸送

京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻（〒606-8502 京都市左京区北白川追分町）Graduate School of Agriculture, Division of Applied Life Sciences, Kyoto University, Kitashirakawa Oiwake-cho, Kyoto 606-8502, Japan.

*E-mail: shirai@kais.kyoto-u.ac.jp

いうこともあり、志方益三先生のお話を是非伺いたいという加納先生の思いにより「志方益三先生を偲ぶ会」の開催と相成った。なお、志方益三先生の業績等については、加納先生が「志方益三先生の生涯」という題目で執筆された [2]。

午前中に京都大学農学研究科の加納研究

////////////////////////////////////

//////////////////// Polarography Lounge //////////////////////

写真3 加納会長の居室にて語り合う志方先生ご夫妻（一番右と一番左）、武居博士（右から2番め）

写真4 ポーラログラフイー35周年記念祝賀会における舘先生と志方先生

室に集まり、志方益三先生がプラハから持ち帰ったポーラログラフ装置や加納研究室に残されている当時の写真（満州だけでなく、樺太（写真2）など志方益三先生の広範囲にわたる活躍を見て取ることができる）などについて、志方隆司先生と武居三郎博士に語って頂いた。武居三郎博士は、志方先生のご令嬢である瑞江氏と吉田神社にあ

る幼稚園で一緒だったことも伺った。武居三郎博士も、当時のアルバムをご持参され、志方益三先生と武居三吉先生が東京帝国大学農科大学農芸化学科に同期生として入学したことや京都帝国大学農学部への創設・発展に共に尽力されたことを話していただいた（写真3）。

話は当然のことながら、当時のポーラロ

写真5 ポーラログラフイー35周年記念祝賀会の寄せ書き

////////////////////

//////////////////////////////////// *Polarography Lounge* //////////////////////////////////

グラフィーのことになった。昨年の討論会で上映した“水銀復活祭”の様子を編集した映像を、大変興味深くご覧になっておられた志方隆司夫妻の様子が印象的であった。また、ポーラログラフィー35周年記念の寄せ書きには、当時、活躍されていた広い分野の著名な方々の名前があり、ポーラログラフに寄せる期待の大きさが伺える（写真4,5）。一方、武居三吉先生が、なぜ志方益三先生がノーベル賞を受賞されなかったのか、と訝しがっておられたことを三郎博士から伺った。水銀電極自体はヘイロフスキー教授が用いていたが、受賞対象の「ポーラログラフィー」は志方益三先生の発案であるので、受賞されなかったことをまるで自分のことのように惜しまれていたそうである。また、志方益三先生がなぜ満州（満洲帝国國務院大陸科学院、後の中国科学院東北分院長春総合研究所）に行かれたのかと武居三吉先生が大変残念がっていた、という話も伺った。小学校の頃から農村問題に関心を持っていた志方益三先生は、中国の貧しい農村部を目の当たりにして、なんとかしたいとの思いがあったのではないかとと思われる。

志方隆司先生には、ご自身が小学校に入学する頃までの志方益三先生との思い出を

語っていただいた。志方益三先生はしばしば「学問には、基礎と応用がある。「学」を「業」と取り替えても成り立つ分野は応用である。」と言われていたそうである。もちろん、農学は後者であるので「役に立つ」研究を常に心掛けていたそうである。最近の所謂「役に立つ」研究とは異なり、重みと信念を感じた。

志方益三先生は、晩年、吉田の自宅から吉田神社の境内まで孫の隆司先生を散歩に連れて行く途中、山の中で拾ったものを題材にその場で講義を始められた、という話も伺った。「山の中は宝物の宝庫である」とメッセージを残されたそうである。隆司先生は、このときの経験が現在の職業に繋がっている、と思い出を語っておられた。また、小学校一年生のときの家庭訪問にて、訪ねてこられた担任と志方益三先生が長いこと話し合い、それが最期になったとの衝撃的なお話も伺った。

先にも述べたが、加納研究室には志方教授、舘教授時代の資料（写真や写真乾板など）が少なからず現存している。写真 6 および 7 はその一部であり、学会発表（あるいは論文）で使用されたと見られるポーラログラムおよびポーラログラフである。また、写真 8 はポーラログラフ 25 周年に志方

写真6 乾板に記録されていたポーラログラム

写真7 乾板に記録していた当時のポーラログラフ

写真8 ポーラログラフ 25 周年に志方先生に送られた寄せ書き

先生に送られた寄せ書きである。これらの写真を前に、歴史的に価値ある資料は是非とも後世に伝え、また会員にも紹介すべきとの提案が参加者からなされた。今後も良い資料が発掘されれば会員の皆さんにも紹介していきたいと考えている。ところで、これらの写真を眺めると、当時の測定、解析、そして発表資料の作成はさぞかし骨が折れたであろうと推察される。測定がますます簡便になった現在ではあるが、データの取り扱いが軽薄に過ぎるのではないかと

写真9 偲ぶ会での集合写真 1列目左から
2人目から順に、志方隆司先生、武居三郎博
士、志方隆司夫人。

反省することしきりである。

場所を研究室から天寅に替えて、食事をしながら偲ぶ会を続けた。天寅は京都大学の近くにあり、歴代のノーベル賞受賞者も愛用した料亭であり、安くて美味しい鍋料理を頂けるということで今でも京都大学関係者にはよく利用されている。隆司先生も折々に大学関係で利用されているとのことであった。ここで撮影した記念写真を写真9に示す。最後に武居三郎先生と志方隆司先生からお話を頂き、閉会となった。

参加者全員が志方先生の偉業とお人柄に思いを馳せた会であった。改めて、志方益三先生は「ポーラログラフイーの発明」だけでなく、人を育ててきたのだと、その偉大さを嘯みしめている。

参考文献

- [1] 加納健司,「志方益三」, 和光純薬時報, **83** (1), pp. 24–27 (2015).
[2] 加納健司,「志方益三先生の生涯」, *Rev. Polarogr.*, **61** (2), 117–125 (2015).